

BOOK

注目の目録



新耀社
6300円/966ページ

『〈民主〉と〈愛国〉』

小熊英二著

Profile

おぐま えいじ 1962年生まれ。慶応大学総合政策学部教員。出版社勤務を経て東大大学院博士課程(総合文化研究科)修了。「単一民族神話の起源」[「日本人の境界」]ほか。

戦後思想は
公的な共同性を
どう位置づけてきたか

著者
評論家
鹿島信吾

冷戦構造の終焉とともに、「戦後民主主義」を否定する保守寄りの論調が噴出するようになった。だが、これらの戦後批判は、対象である戦後思想そのものをどこまで正確に捉えているのか。こうした問題意識から、戦後思想の総括を試みたのが本書である。

著者はまず、敗戦から55年体制の成立頃までを第一の戦後、それ以降1960年代末までを第二の戦後と区分。その上で、第一の戦後に活躍した思想家として丸山真雄、大塚久雄、竹内好、石母田正らを、第二の戦後の代表として吉本隆明、江藤淳、鶴見俊輔、小田実らを取り上げ、それぞれの思想形成を丹念に辿っていく。ここで著者が重視したのは一人一人の思想家のライフヒストリーと、当時彼らの言葉が表現しようとしていた心情、思想の最高の部分を再現することだった。それゆえ、各章は独自の思想評論として単独で読むこともできる。が、その一編一編をモザイクのように組み合わせた本書は、石造り建築のように堅固な構造

Contents

『〈民主〉と〈愛国〉』

目次(抄)

- 第1章 モラルの焦土—戦争と社会状況
- 第2章 総力戦と民主主義
—丸山真男・大塚久雄
- 第3章 忠誠と反逆—敗戦直後の天皇論
- 第4章 憲法愛国主義
—第九条とナショナリズム
- 第5章 左翼の「民族」、保守の「個人」
—共産党・保守系知識人
- 第6章 「民族」と「市民」—「政治と文学」論争
- 第7章 貧しさと「単一民族」
—1950年代のナショナリズム
- 第8章 国民的歴史学運動
—石母田正・井上清・網野善彦
- 第9章 戦後教育と「民族」—教育学者・日教組
- 第10章 「血められた民族主義」の記憶
—竹内好

ほか

を持っている。

ライフヒストリーを重視するのは、戦争体験こそ戦後思想の原点だからだ。第一の戦後に活躍した思想家たちは敗戦時三〇歳前後の戦前派だ。総力戦の実態をつぶさに見た彼らは、戦中の言葉を読み換えるという方法で新しい公共性を唱えていく。たとえば、減私奉公に対して、主体性を確立した個人が政治に参加する「国民主義」を提起した丸山は、国家に抗する「真の愛国」を見出していた元学徒兵らの共感を呼んだ。竹内の国民文学論、石母田の国民的歴史学運動も同様で、「愛国」としての「民主主義」だったことが戦後思想の特徴だという。

60年代に入ると敗戦時に二〇歳前後だった戦中派や少国民世代が、「戦後民主主義」の虚構性を批判して論壇に台頭してくる。吉本は公より私を優先する思想を過激に唱え、江藤はアイデンティティを持ち出して国家を語ることで、ともに民主と愛国の共存状況を解体していった。とはいえ、年長世代の悔恨や屈辱の痛みを理解するには、彼らの戦争経験は限られていたという。同じ世代でも、身をもって従軍や空襲を体験した鶴見や小田らは、また別種の思想を紡いでいった。

戦争の記憶が全く風化した今日、第三の戦後に対応する新たな言説が求められているのは確かであろう。しかし、戦後民主主義の無効性を指摘する少なからぬ論者が多様な「戦後思想」を系統的に理解しておらず、その結果、議論が二人相撲に終わっている」という結びの一言は痛烈だ。本書に触れずしてもはや戦後思想は語れないという意味ですでに古典の名に値しよう。